

提 言

幼小児期における遊びの空間・時間の大切さを
取り戻すべきである

岡田 知雄（日本大学医学部小児科教授／日本小児保健協会会長）

わが国の、都市化した社会において、近年顕著になってきた「小児の肥満や生活習慣病」の増加の背景と、学校におけるいじめや発達障害を含めた「心の問題」の背景には、共通した幼小児期から皆で一緒になって遊べる身近な空間・時間がなくなったこと、つまり近年における「小児の成育環境」の劣化と関連していることを、筆者は、30年以上続けてきたフィールドワークである小児の生活習慣病予防健診やその外来診療から実感するところである。わが国は、第二次大戦後経済成長を優先し、急速に裕福で便利な社会を築きあげてきたように見えるが、これは実は子どもの成長にとって重要な幼小児期における成育環境を犠牲にしてきたことと表裏一体になっていたのである。子どもの環境に詳しい仙田 満氏の研究に示されているように、都市化社会の陥穽として、草木や小川といった生物のいる身近な自然の空間や大きな声を出してのびのびと皆で遊べるような広い空間が、戦後10年（1955年）以降今日までにほぼ完全に失ってしまった。これには、勿論1965年以来急速に普及した自動車も拍車を掛けることになった。また、このような身近な外遊びの喪失とは、逆相関の関係にある屋内におけるテレビの視聴などICTを含むスクリーンタイムとして、身体活動不足、かつ孤の時間がますます増加するという結果になる。幼小児期においてこのような空間・時間の大切さとは、ヒトとしてともに生きて行くための身体ばかりでなく心の成長と発達のためのコミュニケーションの場であることに、古今東西変わることはない。図らずもこの大切さが、2011年3月11日の東日本大震災と東電福島第一原子力発電所事故により、証明される結果となった。災害発生後わずか1年足らずの間に、子どもの肥満の急増と心の問題や虐待の増加である。

わが国では、現在高齢者の福祉の問題で手一杯の感があるが、わが国の子どもたちが「明るく、やさしく、逞しく」夢を持って生きて行けるような社会を築くために、子どもの人権として、子どもの成育環境の整備の大事などである、幼小児期における遊びの空間・時間の大切さを、われわれ多くの成人は認識し、協力して取り戻せるように運動しなければならない。

